

新横須賀市史 通史編 近現代 目次

序
発刊に寄せて
目 次
凡 例

はじめに 一 本書の構成と概要

1 横須賀の近現代と本書の位置

戦前のあゆみ 戰後の横須賀市

本書の位置付け

2 本書の内容構成

第一編 軍港都市の形成 第二編 都市化と地域社会

第三編 恐慌・戦時期の軍港都市 第四編 敗戦、上領から復興へ

第一編 軍港都市の形成

第一章 二六 地方行財政制度の確立

第一節 近代町村の成立

1 明治の変革と町村

明治維新と三浦郡の村々 大区小区制と戸長制 民費の徴収 横須賀町の誕生

2 三新法体制期の三浦郡

県会・郡会・町村連合会 戸長役場と町村委会 地方税と町村費用

3 兵事行政の展開

徵兵制と各町村 三浦半島への行幸啓と西南戦争

4 政治と選挙

明治地方制度と選挙 自由民権運動と横須賀

第二節 明治地方制度と町村

1 町村制の施行と三浦郡

町村会と町村長 多様な役場事務 地方財政制度

2 兵事行政の進展

日清戦争と三浦郡の町村 日露戦争と三浦郡の町村

3 日露戦後経営と町村

町村税の滞納と財政政策 横須賀町の社会基盤整備

4 政治と選挙

初期の衆議院議員選挙 県会議員選挙と地域

明治期の農漁業と商業

第一節 明治期の農業

第二章 空

六一

第二章 空

三二

1 地租改正と明治初年の農村

地租改正と村々 明治前期の農業 牧畜会社

2 農会と農事改良

三浦郡農会の設立 浦賀町農会の事業

第二節 漁業組合の発足

1 明治中期の漁法

三浦半島の旧慣漁法 漁業権と紛争

2 漁業組合と漁業権

野比漁業組合の発足 沿岸漁業の多様化

第三節 軍港都市の誕生と商業

1 近世市場の解体

干鰯問屋・廻船問屋のゆくえ 商社政策と水揚商人 横須賀の初期商人

2 近代市場の形成

浦賀卸商の繁栄 明治期の軍港経済

第三章 空

第一節 造船業

1 浦賀船渠の創立

東京湾での船渠構想 浦賀船渠株式会社の設立

七一

明治期の民間工業と交通

vi

浦賀船渠の創立

東京湾での船渠構想

浦賀船渠株式会社の設立

vii

2 東京石川島造船所分工場の開業と譲渡

東京石川島造船所と川間進出 二船渠の競争と浦賀船渠への一本化

3 日露戦争期の発展

日露戦争と浦賀船渠 諸工業

第二節 交 通

1 道路網の再編

幹線道と坂道改修 里道とトンネル開削

2 路上車両の登場

人力車 乗合馬車

3 航路と船舶

汽船航路 渡船航路

4 横須賀線の敷設と開業

構想と敷設 開業と利用

5 郵便・電信・電話

通信網の形成 電話事業の開始

第四章 一三四 国内充実期と対外進出期の軍事

第一節 軍事施設と諸機関の設置

1 鎮守府と軍港

横須賀造船所の海軍移管 海軍提督府の設置 東海鎮守府の設置
横須賀鎮守府の設置 東京湾要塞の建設 西南戦争と横須賀
海軍諸機関の整備と周辺地域

2 造船所の発展

艦船の建造 船渠と船台の建設 海軍水道の建設

第二節 日清・日露戦争期の横須賀

1 日清戦争

日清戦争と横須賀の義兵 戰勝下の横須賀

2 日露戦争

日露戦争と横須賀 海軍施設の拡充と横須賀海軍工廠

第五章 一七三 学校教育の開始

第一節 学校教育の開始

1 小学校の設立

浦賀郷学校の設立 学制頒布と小学校の設立 浦賀東岸・西岸小学校

2 小学校を支える仕組み

浦賀師範学校と教員養成 学校世話役と経費

3 小学校教育の展開

就学の奨励 厳しい進級試験

第二節 小学校教育の普及

1 教育制度の整備と教育の普及

教育制度の整備 小学校令の施行と学校の統合 三浦郡教育会と教師

豊島小学校の沿革史から

2 強まる規制

学校儀式の制度化 学校規則の制定 日清・日露戦争と学校

明治期の社会と文化

第一節 宗教と文化

明治期の宗教

神仏分離と地域信仰 社寺の改革 横須賀海軍とキリスト教

軍港の文化と風俗

浦賀から軍港へ 「軍港門前町」の形成 三浦半島と海水浴

第二節 軍港の形成と灾害・救援

災害と救援

大火と風水害 消防組の設置 海難

衛生

伝染病の流行 近代的医療機関の登場 ごみ処理と火葬場・墓地

第六章 三三

第六章

宗教と文化

明治期の宗教

神仏分離と地域信仰 社寺の改革 横須賀海軍とキリスト教

軍港の文化と風俗

浦賀から軍港へ 「軍港門前町」の形成 三浦半島と海水浴

第二節 軍港の形成と灾害・救援

災害と救援

大火と風水害 消防組の設置 海難

衛生

伝染病の流行 近代的医療機関の登場 ごみ処理と火葬場・墓地

第六章

第六章

宗教と文化

明治期の宗教

神仏分離と地域信仰 社寺の改革 横須賀海軍とキリスト教

軍港の文化と風俗

浦賀から軍港へ 「軍港門前町」の形成 三浦半島と海水浴

第二節 軍港の形成と灾害・救援

災害と救援

大火と風水害 消防組の設置 海難

衛生

伝染病の流行 近代的医療機関の登場 ごみ処理と火葬場・墓地

第一編 都市化と地域社会

第一章 三六

市政と地域社会

第一節 大正デモクラシー期の市政

1 市政の開始

第一回市会議員選挙と初代市長 最初の予算 周辺町村の状況

2 市政の混乱

初期の市政 輸入市長の誕生と市政

3 都市行政の展開

社会基盤の整備と都市計画の開始 財政難と海軍助成金 米騒動と社会政策

4 横須賀市と陸海軍

兵事行政の諸相 海軍水道と市営水道

5 政党と選挙

代議士小泉又次郎の登場 労働運動の高揚

第二節 政党政治期の地域社会

1 震災後の政治と社会

震災復旧への対応 震災復興事業と都市計画 稲楠土地交換問題

2 昭和初期の地域政治

不況下の社会情勢 緊縮財政

第二章 三〇 多様化する農漁業と商業

- 3 政治と選挙
第一五回総選挙と県会議員選挙 労働運動
第一六・一七回総選挙と二大政党政治 市会議員選挙
第一八回総選挙と県会議員選挙

第一節 近郊農業の発達

商業的農業の展開

- 1 米麦生産 野菜出荷と三浦大根

組合の組織化

- 三浦郡農会の農事視察 産業組合三浦興産会 畜産組合と競馬

第二節 漁業の多様化

1 沿岸漁業と遠洋漁業

- 漁法と漁業組合 野比漁業組合の活動 三浦水産組合の遠洋漁業

2 魚市場の形成

- 市域の魚市場 長井村の魚市場

第三節 軍港都市の成長と商業

1 大戦景気の時代

- 軍拡期の商業 塩専売制と浦賀

三〇四

三〇三

三〇二

第三章 三一 民間工業の展開と陸上交通の本格化

第一節 民間工業

1 浦賀船渠の困難と飛躍

- 日露戦後の不振 第一次世界大戦下の飛躍 不況下の浦賀船渠

2 諸工業の展開

- 第一次世界大戦期の発展 不況下の諸工業

3 電気・ガス事業の発展

- 電灯事業の開始 ガス事業の開始

三三一

三三〇

三二九

第二節 交 通

1 横須賀線の変化

- 第一次世界大戦期 戰間期

2 湘南電鉄の登場

- 民間鐵道構想 湘南電鉄の開業

3 道路法の施行と震災復興

- 幹線道の整備と舗装 市町村道の整備

4 車と船

三四六

第一節 日露戦争後の軍事施設の充実

1 海軍工廠と軍港

海軍工廠と職工　軍港の整備—浚渫・埋立・堀割
海軍水道の拡充と軍用地の整備

2 陸軍の変化

日露戦後の陸軍施設と上町　砲台の変化

第二節 第一次世界大戦期の軍の変貌

1 鎮守府隸下の変化

第一次世界大戦と海軍部隊　潜水艦・自動車の導入　海陸軍機関の演習
軍縮期の海軍工廠　海軍水道の拡充

2 航空機の導入

横須賀海軍航空隊の開隊　追浜飛行場の設置

3 大正時代の社会情勢と海軍

大衆化時代と開かれる海軍　廢兵器の下付　大本教と横須賀海軍
関東大震災と横須賀海軍　戦艦「三笠」の保存

義務教育の延長と中等教育の充実

第一節 義務教育の充実

1 迫られる施設整備

義務教育年限の延長　船越小学校の拡充　浦賀町の小学校　長井小学校など

2 教育内容の充実

浦賀小学校の一教室　体育・体操の重視　衛生への取り組み

新しい教育の展開

3 教育と行政

就学奨励と父母会　教育と行政

第二節 中等学校と各種教育機関の設立

1 市立高等女学校の設立と充実

市立高等女学校の設立　女学校の内容　県立移管

2 実科高等女学校の設立

女子芸術学校の設立　実科高等女学校

3 中学校の設立

県立第四中学校の設立　横須賀中学校の教育　私立中学校の設立

4 各種教育機関の設立

実業補習学校　幼稚教育の開始　市立盲学校の設立

第六章 四四 市制施行後の市民生活と文化

第一節 宗教と文化

- 1 社寺の再編
神社の統廃合 関東大震災と社寺復旧

- 2 軍港の文化と風俗
軍港横須賀の風俗 軍港観光の増加

第二節 関東大震災と横須賀

- 1 関東大震災
横須賀の被害 行政の対応 戒嚴令と陸軍の活動 医療活動と罹災者の避難

- 2 公設消防の展開
横須賀の大火 消防組の活動

第三節 都市化の進展と衛生問題

疾病と医療

慢性伝染病の深刻化 医療機関の拡充

- 2 ごみ・屎尿処理と火葬場・墓地
ごみ処理 屎尿処理 火葬場と墓地

第一編 恐慌・戦時期の軍港都市

第一章 五〇〇 昭和戦前期の市政

第一節 準戦時期の横須賀

1 満州事変から日中戦争へ

恐慌期の市長と財政整理 土着市長と財政政策

恐慌下の横須賀 準戦時期の市政と市長

大横須賀の建設

2 選挙肃正運動の展開

第一九回総選挙と小泉又次郎 県会議員選挙 第二〇回総選挙

市会議員選挙

第一節 戰時下的横須賀

1 日中戦争から太平洋戦争へ

日中戦争期の市政と財政 岡本市長の誕生と翼賛体制の形成

大軍港都市の建設と財政 戰時下の市政と銃後体制 軍都の疎開政策

2 翼賛選挙

第二回総選挙 市会議員選挙

第二章 五四〇 恐慌・戦時期の農漁業と商業

第一節 恐慌・戦時期の近郊農業

1 恐慌の影響

昭和恐慌と市域の農業 野菜栽培の発達

2 戰時下的農業と農村

三浦半島の農産物 作付統制と野菜増産

供出とヤミ

第二節 軍港と漁業・漁村

1 恐慌期の漁業

軍港地区の漁業 漁村の更生

2 戰時下的漁業と漁村

鮮魚の出荷統制 戰時下的軍港と漁業

第三節 恐慌・戦時期の商業

1 不況対策

恐慌と横須賀市街地の商業 さいか屋の復興

海軍工廠工友会と小売業者

2 戰時下的商業

商業統制 買出部隊と取締 応召商家の支援と転業

第三章 戰前・戦時期の民間工業と交通

第一節 民間工業

1 浦賀船渠

営業の活発化 戰時下的浦賀船渠

2 諸工業の展開

諸工業の發展 戰時下的諸工業

第二節 交 通

1 湘南電鉄から京浜電鉄へ

鉄道事業 バス事業との競合と兼営

2 戰時下的交通

鉄道 バス

3 戰時下的電気・ガス・通信事情

電気・ガス事業 郵便局

第四章 600 戰時色を強める市内と軍事機関

第一節 準戦時・戦時期の市内

1 日中戦争前後の状況

海軍航空廠の設置 市街地での模擬戦と演習 日露戦争の記念式典と時局
諸事件と横須賀鎮守府

2 日中戦争と市民

大規模化する国威発揚式典 戰死者の帰還
日中戦争と海軍工廠・水道

秘密にされる軍施設 非常時の海軍工廠
逼迫する給水事情 海軍諸施設の求人募集

第二節 戦時期の横須賀鎮守府

六四

- 1 横須賀鎮守府と太平洋戦争
海軍諸機関の日常業務 横須賀鎮守府の警備体制
- 2 戰時下の海軍工廠と航空技術廠
海軍航空技術支廠の設置 追浜海軍航空隊と相模野航空隊 戰時下の海軍工廠
- 3 第六船渠の建設と建艦事業の消長
第六船渠の建設と建艦事業の消長 ドゥーリットル空襲

第五章 空 戦

六五

第五章 空 戦

第一節 忍び寄る戦争の影

- 1 小学校教育の展開
児童増加への対応 船越小学校 大津小学校の教科指導案 進学と就職
- 2 中等教育と社会教育の充実
中等教育機関の充実 中等学校への進学と進路 青年学校の設立
- 3 青年団の設立と活動
青年団の設立と活動

第二節 戰時下の教育

- 1 小学校から国民学校へ

六六〇

第六章 空 戦

六五五

第六章 空 戦

第一節 恐慌・戦時期の社会と文化

- 1 時局と宗教
東郷神社の招致運動と神社昇格運動 戰時への対応と宗教団体法
- 2 戰時体制下の文化と風俗
軍港と観光 軍港と風俗 横須賀の史蹟 横須賀文化協会
- 3 戰時下の軍港と灾害・救援
消防組から警防団へ
消防組の再編と大火・豪雨 警防団と防空
- 4 戰時体制と衛生行政の変質
保健と健民 医療機関の増設と限界 ごみ・屎尿処理と火葬場・墓地
- 5 戰前の社会事業
軍関係および私設団体の事業 市による各種事業

第四編 敗戦、占領から復興へ

第一章 七六 占領と横須賀

第一節 連合国軍の上陸

1 横須賀上陸

上陸作戦と部隊の編成 L—DAY

2 占領軍の犯罪と武装解除

上陸軍の犯罪 占領下の横須賀基地

3 残務処理からSRFへ

軍港都市横須賀の武装解除 SRFの誕生

第二節 軍港都市からの転換をめざして

1 軍港都市からの転換

更生計画の策定 転換計画の策定

2 旧軍港市転換法による「転換」の進行

旧軍港市転換法の成立 軍転法とまちづくり 「転換」の進行

軍転法のその後

第三節 旧軍の清算と自衛隊の発足

1 軍から民へ

海軍水道の移管 消滅する鎮守府 浦賀・久里浜における復員・引揚

2 陸上自衛隊の発足 海上自衛隊の発足 横須賀の海上自衛隊

3 自衛隊創設
自衛隊教育の開始と横須賀
草創期の陸上自衛隊教育
保安大学校・防衛大학교의開校 武山地区の陸海教育活動

第二章 七三 戦後市政の展開

第一節 梅津市政と占領軍

1 敗戦と横須賀

敗戦と市民 市の対応 占領軍の受け入れ

2 基地と市政

米海軍横須賀基地司令官 デッカー司令官 ヒギンス軍政官 新生婦人会

自治体警察

第二節 戦後市政の出発

1 民主化の動向

天皇巡幸 食糧危機 町内会の解散

2 革新勢力と政党

戦後労働運動の高揚 政党的復活

3 復興への道のり

復興計画の開始 財政の膨張と逼迫
太田市長とドッジ・ライン

公職追放と梅津市長の退任

第三節 復興期の市政

1 石渡市長の登場

行政整理と赤字財政 逗子町分離と浦賀への波及

2 独立の回復と市政

朝鮮戦争とその影響 逆コース

3 講和と市政

講和・安保条約と横須賀 梅津市長の再登場 平和産業都市へのジレンマ

第四節 高度経済成長期の市政

1 長野市政の登場

講和後の政治状況 保守派の混亂
革新系市長の誕生

2 長期市政の動向

市長選挙(再選→四選)の状況 市議会の状況

3 施政とその方針

市民政策 総合開発・産業振興

4 安保と基地問題

自治体外交 接収解除の取り組み 安保体制と市政

八三

第二章 八〇

戦後の農漁業と商業

第一節 戦後改革と農業・農村

1 食糧危機と農地改革

ヤミと供出 軍港都市の農地改革 農業の復興

2 近郊農業の復興と農村生活

野菜栽培と酪農 農村の生活改善

八一

第二節 戦後の沿岸漁業と遠洋漁業

1 漁業制度改革

漁業協同組合の設立 市域の沿岸漁業

2 戦後軍港地区の漁業

軍事施設の存続と補償 マグロ遠洋漁業基地久里浜港
漁村の変貌 捕鯨船団基地長浦港

八二

第三節 戦後の商業

1 商業の復興

ヤミ市・マーケット 統制撤廃、青果物取引とさいか屋

2 横須賀商工会議所の設立

設立をめぐる新旧勢力 商工会議所の活動

八三

第四節 高度経済成長期

1 変貌する農業・農村

高さの農業・農村

八四

第四章

九六

昭和戦後期の工業と交通

第一節 転換工場の時代

- 1 軍需から民需へ
海軍施設から民間工場へ 浦賀船渠の復興
- 2 米軍軍需と特需会社
再接收と企業 富士自動車
- 3 電気・ガス・交通の復興
電気事業 ガス 交通機関

第二節 高度経済成長期

- 1 諸工業の発展と発電
諸工業の発展 久里浜の火力発電と核燃料生産
- 2 自動車工業・造船業の展開
関東自動車 日産自動車 浦賀船渠

第五章

九三

昭和戦後期の教育

第一節 教育の戦後改革

- 1 民主化教育の開始
戦前教育からの脱皮 六・三制教育の開始 新教育の展開
- 2 戦後教育の展開
不正常授業の解消 公立高等学校への転換 諸学校の動向

九三七

第二節 高度経済成長期の教育

- 1 逆コースと新しい動き
管理強化への動き 社会教育の展開
- 2 高度経済成長期の学校
小中学校の動向 諸学校の動向

九三一

農業の後退 生産基盤整備事業

沿岸漁業と遠洋漁業の消長

遠洋漁業の後退 沿岸漁業の基盤整備

人口増加と商店街

三笠銀座の共同ビル化 商店街のゆくえ

第六章 九四 戰後の社会と文化

第一節 戰後改革と社会

1 戰後改革と宗教

神道指令と社寺 忠魂碑の撤去問題

2 観光・文化の再生

観光・文化都市へのあゆみ ペリー上陸記念碑と明治憲法記念碑

3 米軍進駐の影響

スレーベニアショップとEMクラブ 特殊慰安施設と街娼 風紀取締条例の制定

第二節 戰後の灾害と衛生問題

1 消防と災害

消防団の再編と自治体消防の発足 火災と水害

2 医療と衛生

保健所と医療機関 ごみ処理と屎尿処理

第三節 高度経済成長期の社会と文化

1 観光と文化

観光施設と行事 文化協会の再発足と文化会館 ベトナム戦争とどぶ板通り

2 防災と治安

火災と水害 公害・交通戦争・地震対策 米軍兵士の犯罪

3 医療と衛生

救急医療と国民健康保険の実施 戰後の上水道事業
ごみ・屎尿処理と火葬場・墓地
社会福祉事業の展開 制度の概要と生活保護 さまざまな福祉 諸団体の活動

第七章 一〇四 住宅都市・基地の街横須賀

第一節 米軍基地と自衛隊

1 米軍基地と横須賀

SRFの技術と労働環境 米軍基地と環境問題 「9・11」と基地の再編

米軍基地のイメージと市民

2 自衛隊と横須賀

横須賀の自衛隊 市民と自衛隊 開かれた自衛隊へ

第二節 人口増加とまちづくり

1 人口増加と宅地開発

住宅問題の深刻化 宅地造成と団地の建設 大規模開発と人口の推移

2 まちづくり計画

総合開発計画の策定 人間都市横須賀構想と開発行政

口絵・扉絵一覧	一〇八
引用・参考文献一覧	一〇九
横須賀市域人口・戸数統計	一一〇
横須賀市財政統計	一一一
あとがき	一一二
執筆分担	一一三
史料提供者・協力者	一一四
横須賀市史編さん関係者名簿	一一五
『新横須賀市史』発刊計画(全一五巻)	一一六

凡例

- 一 本書は、明治元(一八六八)年の維新政府成立から、おおむね戦後の高度経済成長期までにいたる、横須賀市域の歴史を対象とした。
- 一 冒頭には全体を概観する「はじめに」を置いた。本文は時期別に四つの編に分け、それぞれの編を政治・行政、産業・経済など内容別に六・七つの章に分けて叙述した。
- 一 本文の叙述にあたっては原則として常用漢字・現代仮名遣いを用い、難読と思われる語句には適宜ふりがなを付した。
- 一 年代表記には原則として和暦を用い、西暦を各項目の冒頭で補つた。明治五年の改暦以前について、和暦(旧暦・太陰太陽暦)が日付までわかる場合には、対応する西暦(太陽暦)の日付も補つた。
- 一 地名表記のうち、市外のものには原則として平成二六(二〇一四)年現在の自治体名を補つた。
- 一 本文中で史料を引用する際には、原文の字体を新字体に、カタカナ表記をひらがな表記に改め、句読点を適宜補つた。また出典史料の表題や参考文献は「」に入れて、原則として表題のみを記した。ただし出典史料が『新横須賀市史 資料編近現代』I～IIIに収録されているものについては、卷数と資料番号を用いて(資I-23)のように略記した。また昭和三二年刊行の『横須賀市史』は旧『横須賀市史』、昭和六三年刊行の『横須賀市史』は『横須賀市史』上巻・下巻・別巻と、それぞれ略記した。史料名に*を付したものは、横須賀市所蔵の行政文書や未刊行行政資料である。